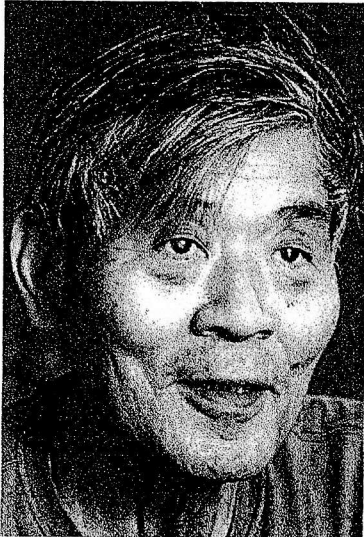


テント日誌 3月24日版より

一月を経たロシアのウクライナ侵攻(侵略)

3月24日(木) 三上治



過日、二つの墓参をした。一つは吉本隆明の墓参りだった。彼が亡くなってからはや10年ということなのだが、僕はいろいろのことに会う度に彼ならどう考えたのだろうかと思ってきた。

かつて彼の思想は僕にとって唯一の指南力のある思想だった。僕は吉本隆明の徒だった。彼の思想は人が誰かの徒になることを拒絶する思想であったが、僕はそれに反して吉本隆明の徒だった。

そんなことを想起しながらの墓参だったが、やはり、彼はウクライナへのロシアの侵攻をどう考えるのだろうかということが自然に浮かんできた。かつてベトナム戦争の時に、話をしたのを思い出していた。

いささか苦い思い出だが、僕がベトナム義勇兵(ベトコン側)に参加したいと言って、諭されたことがある。義勇兵で行ったところでベトナム戦争に関

係できるということではないのだということだったが、これはずいぶんとこたえた。僕には戦争について、国家についてより深く考える契機になった。



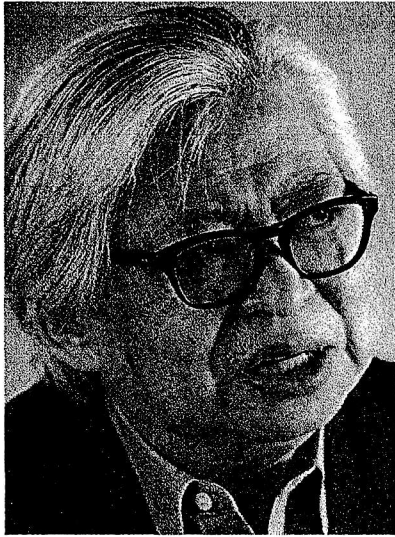
淵上太郎は亡くなって三年目だが、彼とは生前中は多くの議論を交わした。だが、僕の考えていたこととどこまで話が届いていたのかを考えさせられることが多かった。彼には『淵上太郎遺稿集』という優れた著作が残されているのだが、それを紐解くたびにそんなことを思った。特に憲法闘争についてである。

プーチンのウクライナ侵攻で僕があっと思ったのは、簡単に戦争をやってしまうということだった。

権力者の意思次第で簡単にやれるということだ。戦争は国家意志の発現だが、それは国家権力者の意思の発現でもあり、国家権力者の意思次第ということでもある。

僕はこの事態の中で改めて日本国憲法が全文などで、国家権力者の意思(意思という名の恣意)で戦争できないように規定していることを思い浮かべた。僕らには国際法的な戦争違法という考えや、この憲法の考えもあって、簡単には国家意思(個人の意思)で戦争などやれないという意識があった。そんな時代だと。

僕はなぜに憲法でこういう規定をしたのか、改めて考えているが、淵上はそのところをどう考えたのだろうか。敗戦の総括があったのだろうが、天皇も含めた軍部の独走(暴走)ということがあって、その反省がここにはあった。



今回の戦争について保坂正康はついでこう言っている。1、ソ連は 20 世紀の戦争で最終的に敗戦体験が希薄であった。2、独裁権力が名目を変えつつ存在し続け、その個性が国家性格になった。3、ロシアの国民、共和国の国民、同盟国の国民、衛星国の国民を暴力的に支配した。保坂のこの要約は的確であるが、1の指摘を日本との比較で考えた。戦後の体制(米ソ支配体制)が解体した要因には米ソが戦争を繰り返したことにあるが、それには敗戦体験の希薄さがあった。アメリカはベトナムでソ連はアフガニスタンで敗戦を体験するがそれは戦争体質とでもいうべき国家構造の反省にはならなかった。その点が憲法との関連で考えさせられたことだが、多分、溯上も同じこと考えるのではないかと思った。彼と今度の戦争と憲法のことでは話は弾んだらうか、と思った。

ロシアのウクライナ侵攻から 1 カ月が過ぎた。この間にいろいろの議論が飛び交い伝わってきた。プーチンの批判とプーチンを一方的に悪者にするなどという意見に大別できると思うが、僕が思ったのはプーチンの考えというか、思想をよく分からないできたということがあった。

彼の意味(支持する人々の意思も含めて、それは現在のロシア国家の意思でもある)の発現がウクライナ侵攻であるとするならば、その意思をよく分からないできたということだ。プーチンの専制的な政治観、強国的思考、ロシア帝国の復権などの知見は得ていたし、それは間違いのないところだった。プーチンのことにはそれ以上の関心を持たなかったし、それはやむえないことでもあったが、もう一つ彼の意味を明瞭に詰めないできたことはある。(このことは中国の習近平にもいえることで早急に探索をしたいと思っている)。



プーチンのことはあまりよくわからないというのは、プーチンがロシアの首相でありながら彼の政治的意思をあまりオープンにしないできたことがある。これは謎のプーチンとか神秘的なプーチンとか言われても来たことである。大国の首相は自己の政治的立場を公開するのだが(施政方針演説などで)、プーチンはそうではなかった。これは彼の国家戦略によるものだった。

彼の国家戦略は内政的には専制的な国家統治を目指すものだった。「プロレタリア独裁」による統治というスターリン主義(起源はレーニン主義)とは違うのであるが、国家主義とでもいうべき統治方法が志向されていた。彼はイデオロギー的には保守主義であり、民主主義をいうが、国民主権とか、憲法制定権力により権力の制限などの民主主義とは違って、専制主義をとっている。政敵の暗殺や投獄、報道の威嚇と抑圧、選挙の不正など伝えられることはその政治的手法も含めて専制的である。

ここにはソ連崩壊後のエリチエン政権がロシアの国家を安定させなかったことがある。彼はソ連崩壊後のロシア国家の名目を変え、独裁的方法で安定させてきたということがある。

プーチンの政治戦略の特徴は内政以上に外政にある。彼はソ連圏の崩壊とソ連邦の崩壊後に追い詰められた状況の中で大国(強国)としてのロシア国家の再建を目指す。それにはロシア国家が力(軍事力)でそれを保持するということであり、戦争(力の支配)を国家戦略に置くということである。

これは国家が安全保障として軍事力を持つということではない。それは他国の支配力として軍事力を保持するということであり、戦争が国際法的に違法といわれる状況の中で、軍事による他国支配を秘した形で保持していることである。軍事戦略は秘密にすることもあってよく見えないことがあるのだが、そこに秘密があった。

プーチンの外政的な戦略は現代国家の国家戦略としてはいわゆる帝国主義的戦略である。彼にはロシア帝国の復活ということがあると言われる。これはネットワーク型の帝国といわれるが、それは名目であり、力(暴力)的支配が背後にある。この帝国ということにはソ連邦が崩壊のあと民族や宗教問題が噴出する中で、統一国家として保持するかということに直面したことがある。旧ユーゴスラビアが民族と宗教問題で分裂抗争を演じ、それぞれの国家になった。ロシアは周辺国家やチエチエン国家の問題で同じような問題に直面した。国民国家ではなく帝国としてこの問題を解決していくことがプーチンの戦略であり、チエチエン戦争はそのだ一步だった。



プーチンは1990年代のエリチエン政権に参加し、2000年の初めに首相になった。あれから長きにわたって、権力の座にあるのだが、その秘密はチエチエン戦争の解決にあったように思う。チエチエン戦争は1990年代(エリチエン政権下)で第一次戦争としてあった、これはアフガン戦争の敗北と重なり敗北としてあった。プーチン政権下で第二次戦争があり、これはロシアが勝利した。

この時プーチンは巧妙な政治技術を駆使したといわれる。モスクワの地下鉄テロなどを自国に機関にやらせながら、これをチエチエンのテロとし、ロシア国民の愛国感情を高め、チエチエンを制圧したというものだ。このテロのことはロシアの機関の責任者が自白した、彼は後に亡命先にイギリスで暗殺された。これはいろいろ説があるが、いずれにしてもプーチンがこの戦争でロシア国家の統治者として力をえたということだ。力の政治(戦争)によって統治力を強めるということを得たのであり、その延長線上にウクライナ侵略は考えられる。ここはプーチンの国家戦略を考えればおのずと浮かんでくることでもある。

ロシアのウクライナ侵攻(侵略)は大義なき戦争と言われる。これはプーチンの国家戦略にあり、それは大義として主張できる代物ではないということである、そのためか、ロシア側のプロパガンダの浸透のためか、NATO 東方拡大とか、ネオナチ化の排除とかがいわれる。NATO の拡大については口実であるが、むしろ、今回のロシアの侵攻によって NATO の防衛ということが正当化であることを示したのでないのか。

ナチ化ということについていえばウクライナ軍に「極右勢力があることは事実である。だが、僕が不思議に思うのはプーチンのロシアがむしろネオナチというべき存在だと思う。だから、彼らがネオナチ批判するのは筋違いだと思える。これは第二次世界大戦でのファシズム(ナチズム)との戦争の歴史を呼び起こそうとしているだけであり、これはロシア国民には一定に浸透力があるのだと推察できるだけだ。僕の目からネオナチ化しているプーチンらがこういうことをいうのは滑稽である。

戦争が覆い隠していたファシズムとスターリン主義の同一性が明らかになった今、スターリン主義と同型の独裁権力がナチ(ネオナチ)批判をしても意味はないのだ。